月例会ダイジェスト【39】

さんぽ会月例会参加者の中で、最も多い職種である産業看護職。4月の月例会は、現職の産業看護職、または産業看護職に転職を考えているという参加者が多数を占める中、学生も多く参加し、「今求められる産業看護職の“見える化”」をテーマに、コンピテンシー（行動に表れる能力、特性、結果や成果と結びつく能力・特性）についての視点も入れながら展開された。コーディネーターは吾妻美佳氏（サッポロビール株式会社）、金森悟氏（伊藤忠テクノソリューションズ株式会社）、楠本真理氏（三井化学株式会社）、高家望氏（株式会社東急スポーツオアシス）の4名。

冒頭で、金森氏より産業看護職の現状について、従業員が50名以上いる東京証券取引所の上場企業を対象に行われた調査の集計結果が示された。この調査によると、現在産業看護職（非常勤を含む）を配置している企業は約4割で、大企業ほど配置している割合が高い。別の調査結果からは、年収は常勤で400～600万円未満が多く、平均472万円。また、看護職を雇う意味として、メンタルヘルスや禁煙、運動、栄養といった様々な健康づくり活動において、産業看護職を配置している企業の方が活動を実施しているというデータも合わせて紹介された。

続いて、産業看護職に就くためのメソッドについて、現職の産業看護職から自身が入職するまでの体験談が紹介された。まず、新卒から産業看護職として入職し、転職を経て現在6年目の吾妻氏は、就職活動では情報収集の他、産業カウンセラーの資格を取る等、幅広い対策を取った結果、2社目で入職することができ、臨床経験がなく初めは薄かった周囲の期待を覆し、今ではグループ全体の体制づくりに携われるようになったと、地道な努力の大切さを語った。また、看護師を経験後に産業看護職へ転職し、現在3年目を迎える湧井亜由美氏は、病院勤務の中で、一次予防でもっとできることがあるのではと思い、転職に踏み切ったと振り返る。また、転職活動で戸惑っていた中、「企業は社員を大事に想い、コミュニケーションをとってくれるかという人間性をみる」という福田氏からのメッセージが届き、とても励まされたと実感を込めて紹介した。

二人の就職体験談の発表後、学生の参加者から、新卒で産業看護職を目指すか、臨床を経験して病院で行われる治療の過程を知ってから産業看護職に進んだらいいか迷っているという率直な質問が投げかけられた。これに対し、吾妻氏は自身の経験上、「臨床経験のあるなしに関わらず、社員の健康のために努力し、結果を残すことが重要」と回答、湧井氏は「どちらの道を選んでも間違いではなく、最後はご縁」、また福田氏は「人の生死に関わることで大事なことが学べるので、まず臨床を経験してほしい」と、それぞれの考えを述べた。

後半は司会の高家氏を中心に、小グループに分かれての意見交換の後、数名がそれぞれの所見を発表し、理解を深め合うディスカッション形式で進められた。まずは“産業看護職で輝いているのはどんな人？”というテーマについて、現職の産業看護職の参加者より、「信念を持ってやりたいことを貫いて、最後には会社から協力を得られる人」「看護職という括りではなく会社のことを考えている人」といった意見があり、高家氏は「相手に理解される前にまず相手の理解に徹してはじめて理解されるのではないか」とまとめた。また、“産業看護職が求められていることは？”というテーマに対して、雇う側の健保組合の参加者が「人間関係、チーププレイ、改善・改革に加えて効率性までも求める」と述べ、これについて高家氏は、成功する3つの要因として①自主性（自ら）、②熟達（成長とその努力）、③目的（本質やゴール）を挙げ、誰のために、何のために仕事をしているのか、使命は何なのかを振り返ることも大事であるとまとめ、併せて産業看護職のコンピテンシーのヒントを紹介した。

そして最後に、これまでの産業保健における様々な方からのメッセージを紹介し、前会長の故半井英夫氏による「産業保健事業の主役は産業看護職」という言葉とともに「途上ではあるが、一人でも多くの方の幸せや健康をつくっていくために、私たちの自己実現したいこと、すべきこと、できることを重ねながら最善を尽くしていきたい」という言葉で締め括った。

左から金森氏、吾妻氏、湧井氏、ディスカッション司会の高家氏

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。
- ホームページ　http://sanpokai.umin.jp/
- FBページ　http://www.facebook.com/sanpokai